ISSN 2188-7330

# ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター

第7号
2017年1月発行

古典籍共同研究事業センター
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

CONTENTS

学術のオープン化のめざすもの、もたらすもの
国立情報学研究所　副所長
（日本語歴史的典籍ネットワーク委員会委員）
安達　淳 ……❶〜❸
デジタル・データの乱読時代へ
電気通信大学　准教授
（公募型共同研究　研究代表者）
佐藤　賢一 ……❹〜❺
古典籍を活用した和漢薬に関する総合研究の進捗状況
富山大学和漢医薬学総合研究所　特命准教授
（異分野融合研究　研究代表者）
伏見　裕利 ……❻〜❼
作業部会における進捗評価を受けて
国文学研究資料館　館長
古典籍共同研究事業センター長
今西　祐一郎 ……❽〜❾
異分野融合の潜在力
第二回日本語の歴史的典籍国際研究集会
フィレンツェ大学　教授
（国際共同研究ネットワーク委員会委員）
鷺山　郁子 ……❿
タグをたよりに三十万点の画像を探ってみる
国文学研究資料館　副館長
寺島　恒世
同館古典籍共同研究事業センター　特任助教
松田　訓典 ……⓫
トピックス ……⓬

## 学術のオープン化のめざすもの、もたらすもの

国立情報学研究所　副所長
（日本語歴史的典籍ネットワーク委員会委員）
安達（あだち）　淳（じゅん）

インターネットの勃興期に盛んに引用されたのが、後掲の図に示したT. S. エリオットの詩の一節です。インターネットのもたらす情報の洪水を懸念する視点で良く引用されたものです。エリオットは一九三四年にこの一節を書きましたが、その五十年後に私の恩師の猪瀬博先生が最後の節を追加して情報社会の課題を論じました(注)。

この詩全体の内容は宗教色の強いものですが、私がずっと気になっているのはこのフレーズのなかに明示されている人間の知の営みの階層性です。Life, living, wisdom（知恵）, knowledge（知識）, information（情報）そしてdata（データ）と下がっていく中で、インターネットのもたらす負の側面を連想させます。これはまた知的なものの価値、継承そして公共性などの特性の違いも象徴しています。

私は日本の学術情報基盤に関わる仕事をする中で、学術活動にインターネットとITの及ぼす様々な影響、特に電子ジャーナルの隆盛、学術のグローバル化のもたらす問題、そして現在のオープンデータ、オープンサイエンスの課題などに翻弄されて今に至ります。その中で、学術に関わる「オープン」化のもたらすものがよく分からないまま、もがき続けてきたという気持ちがいたします。

LivingやLifeについて論じるのは哲学者や文学者の領域と思いますので、それより下のことについて考えてみたいと思います。

# 学術のオープン化のめざすもの、もたらすもの

国立情報学研究所　副所長　（日本語歴史的典籍ネットワーク委員会委員）　安達　淳

知恵および知識のコアな部分は、家族、コミュニティあるいは国の中でいろいろな形で継承されてきました。専門性の高い知識は営利的な学校で提供されることもある一方で、公共性の高いものは、例えば義務教育で教え込むような形で身につけさせてきました。

知恵や知識は抽象度ないし一般性が高く、いろいろ応用が利きますし、その運用能力が問われます。いわゆる「読み書きそろばん」と呼ばれてきたものがこの一角を占めると思います。現在は、それに英語やＩＴスキルが入ってきて問題が難しくなってきたといえましょう。

これに比べて、情報は一般性に欠けローカルなものが多い一方で、ビジネス的価値のある知的資源といえます。例えば、「夕焼けがきれいなら明日は晴れ」という知恵はお金にならなくとも、「明日の東京の午後の雨の確率は七〇％」という情報は商売になります。逆に言いますと、情報とは受け取る側が価値を認めているものといえます。

研究者の行っている論文発表はこの情報の生産に対応していると考えられます。一方、碩学といわれる人々は、情報を知識ないし知恵に昇華することをおこなっているといえましょう。

さて、それではデータはどのような価値を持つのでしょうか。例えば気象衛星の送ってくる写真を見てもふつうの人には何も分かりませんし価値も見いだせません。気象予報士などの解釈を介して天気予報という情報価値のある知的資源にしてもらわなければ役立ちません。ここにビジネスの介在する可能性が出てきます。

どうやら知識、情報、データという階層の境界はコミュニティにより異なるようです。データは専門家と呼ばれる人には情報として受けとめられることが多いわけです。ふつうの人にとってはちんぷんかんぷんなデータを情報と見ることのできる人がその領域の専門家と呼ばれるのでしょう。

さて、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」で進められている活動をこの知的資源の階層から見てみますと次のようになると思います。

古い書物の画像データベースはふつうの人にとっては、くずし文字で書かれ、理解することのできないデータとして受けとめられます。しかし今後、研究者によるテキストへの変換を経て、これを情報として受けとめる人の数が増えていきます。さらに注釈をつけたり現代語訳も用意されると価値を見いだす人の数はもっと増えていくと期待されます。

私などの素人は、さらに一段あげて、古典籍から分かる過去のオーロラ現象とか、大地震の記録というレベルの情報や知識に昇華していただいてやっとその価値を受けとめることができるのです。

このように、よく価値のわからないデータを情報や知識に昇華するのを加速させる方向性が「オープンサイエンス」のねらいの一つだろうと思います。

さて、それではエリオットの知的資源の階層と「オープン」はどのように考えればよいのでしょうか。ＩＴビジネスの文脈では「オープン」とは、より大きな利益を得るために、ある一部の情報やサービスを利用者の費用負担なく提供することを含意するように思いま

す。

人に最低限の知恵と知識を与えようとする近代の教育でも元々はこの「オープン」のような性格があったと思います。欧州には高等教育でもこの理念を持ち続けている国がありますが、日米では受益者負担という考え方に変質しているようです。

電子ジャーナルのオープンアクセスや研究データのオープンデータ化も同様の考え方で広がってきたと思います。従って「より大きな利益」に該当するものが何かを押さえておく必要があります。

学術活動は単純化すれば国がスポンサーといえることから、「より大きな利益」とは国民の幸福に資することといえるでしょう。教育研究活力の増大、知的レベルの向上、そして経済活動の活性化などが思い浮かびます。

しかしこのような理念的な目標ではなかなかスポンサーを納得させることはできません。一般の人々にわかり易い効用をアピールする工夫が必要です。

本稿を書いているときに米国の大統領選が行われ、大きな衝撃を受けました。その中で注目した動きは、米国のＴＰＰからの離脱宣言です。私はＴＰＰの是非についてはまったく判断ができないのですが、貿易に関する障壁をなくしていくことにより、不利益を被るセクターもあるが全体としては良くなるというのが推進派の基本的な主張だと思います。

オープンサイエンスもこれに似ていると感じています。学術における「オープン」化も、基本的には教育研究活動におけるさまざまな障壁を減らそうとする点で同様といえるのではないでしょうか。全体としては良い方向であるとしても、「オープン」化がもたらす不利益をきちんと把握しそれを救済する策を適切に用意する必要があります。それがないと、ＴＰＰと同様にグローバル化に翻弄されるということになりかねません。一方、受益者負担などといって「オープン」化を進めないと、研究活力を損なってしまう懸念が生まれます。

このような議論を学術界で深め、戦略を明確にすることがのぞまれるのですが、それには、この古典籍ネットワーク構築のような実践のなかでデータ利用の様々な活動を活性化することが重要だと期待しています。

*Where is the Life*
*we have lost in living?*
*Where is the wisdom*
*we have lost in knowledge?*
*Where is the knowledge*
*we have lost in information?*

*T.S.Eliot*, Choruses from 'The Rock' (1934)

*Where is the information*
*we have lost in data?*

*H.Inose* / *J.R.Pierce* (1984)

（注）Hiroshi Inose, John R. Pierce, Information Technology and Civilization, W. HFreeman and Company, New York, ISBN 0-7167-1515-5, 1984.

# デジタル・データの乱読時代へ

電気通信大学　准教授
（公募型共同研究　研究代表者）
佐藤　賢一

研究室や自宅に居ながらにして、世界各地の資料所蔵機関が有する古典籍の画像データを横断的に検索できるようになったことは、古典籍に関わる者の研究環境を劇的に変えつつある。インターネットの草創期から普及の歩みを傍らで（つまり、情報科学とは縁もなかった研究者として）見てきたような世代の率直な感想としては、隔世の感がある。

その典型的な恩恵としては、まさに時空を超えて異質のカテゴリーと思われている分野と時代の画像を並列して参照することで、思わぬ発見やアイディアがもたらされるという経験であろう。そのような体験を筆者自身も何度か味わっている。筆者が専門とする科学史や技術史と言われる分野は、古典籍の各ジャンルの中にあっては文字とともに画像を大量に扱うことの多い分野であるが、単一の分野だけにこだわっていては対応できない限界があることも事実である。様々な分野の古典籍の画像データを比較参照することも重要なことを痛感している。二つほどそのような事例を紹介したい。

一つ目は、兵学者・松宮観山（一六八六―一七八〇）が享保期に著した、オランダの測量術を紹介した著述として知られる『分度余術』（一七二八年）の挿図である。松宮は北条流の兵学者・北条氏如（一六六五―一七二七）の門人として知られるが、この『分度余術』には幾つかのオランダ伝来の測量道具などが図入りで紹介されており、従来、この方面の話題にのみ関心が集中していたきらいがある。しかし、松宮の兵学の素養を考えるとオランダだけがその情報源であったとは考えにくい。軍事技術・兵学に関する漢籍も当然その視野に入っていたことは間違いない。とはいえ、情報源が限られたオランダ由来の知識とは違い、膨大な漢籍を一々当たるのは、一昔前であれば相当な時間がかかったはずである。昨今は幾つかのキーワードをコンピューターの端末に入力して検索をすることで、対象となる候補の情報を絞り込むことが容易にできる。その結果、得られた情報として次の画像がたちどころに入手できた［図1］・［図2］。松宮が参照していた漢籍の兵書は、明代の王鳴鶴『登壇必究』（一五九九年）であった。そこに描かれている唐風の人物はほぼ同一であり、他にも数点、同書の挿図と同じ物が『分度余術』で

［図1］『分度余術』巻上より
（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3508471）
（国立国会図書館蔵）

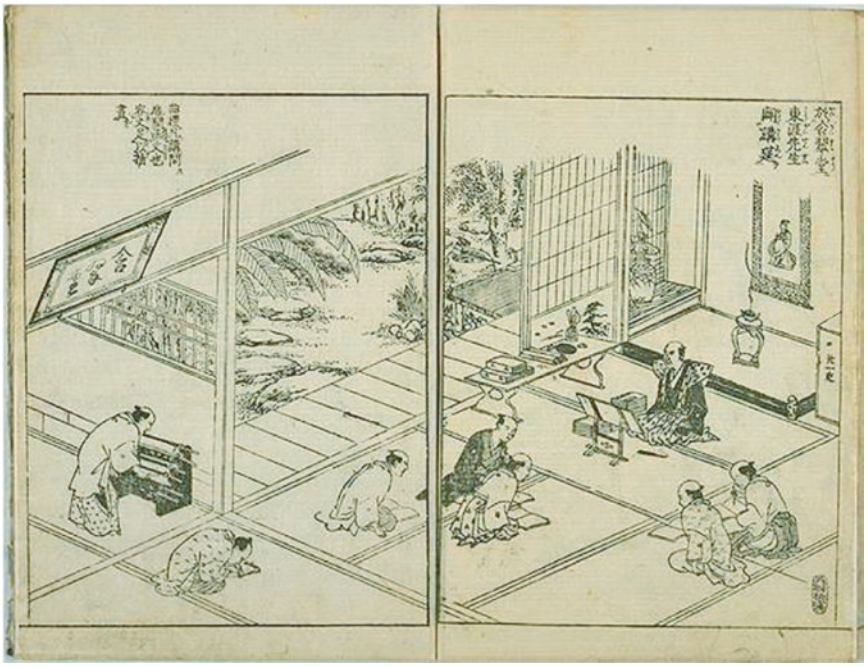
［図2］『登壇必究』巻二七より
（https://archive.org/details/02092226.cn）
（北京大学蔵）

は採用されている。分かってしまえば実に呆気ない情報であるが、漢蘭折衷の測量術という視点を意識して、今後は松宮の研究を進めねばならないことになった意義は大きい。

もう一つは和算書の事例である。武田真元編『算法便覧』（一八二四年）には和算の塾での教育風景を描いた挿図が収められている。算術の師匠が数名の門人・子どもたちにそろばんや算木の扱い方を指南している場面である。これなどは、幕末の私塾での教育風景の一端を垣間見せるイメージとして捉えられがちであるが、この挿図も以前どこかで似たような構図を見た記憶があった。そのように漠然とした記憶の真偽を、今や画像検索で即座に確認することができる時代となった。[図3]・[図4]に示したように、『算法便覧』の挿図と『摂津名所図会』巻一（一七九八年）における伊藤東涯の講義風景の図は、登場人物の配置といい、座敷の鳥瞰の仕方といい、その構図が一緒であることは一目瞭然であろう。種を明かせば、この和算家・武田真元（？―一八四六）も大坂で塾を開いていた人物であり、その編著書に『摂津名所図会』の影響があったとしてもさほどの不思議はない。この挿図の元ネタを知ってしまったこれ以後、『算法便覧』のこの絵にどれだけの数学教育の現場を示すリアリティがあったのかは、いったん保留して考察しなければなるまい。

どれだけデジタル化されたコンテンツが増大したとしても、一人の研究者が生涯の間に研究素材として有効に使える文字・画像の情報量はしょせん有限でしかない。世界中で日々蓄積されているデジタル情報の膨大さを前にすると本当に微々たる量で、嘆息すら出ない。それだけに、資料や古典籍の精読と（発見のための）乱読のバランスが研究の実践では大事となるのであろう。最近のデジタル画像の蓄積と普及は従来の資料「乱読」をさらに加速させるはずである。この乱読にあたるデジタル・データを駆使する作業にも、研究者としてのセンスとスキルが求められていくに違いない。そのような時代にも対応しうる基本的な情報を精査して科学史・技術史の方面から提供していくことが、筆者の担当する公募型共同研究の位置付けであろうと考えている。

[図3]　『算法便覧』巻一より
（http://www.i-repository.net/contents/tohoku/wasan/l/a013/06/a013060029l.png?log=true&mid=undefined&d=1477441645629）
（東北大学附属図書館蔵）



[図4]　『摂津名所図会』巻一「含翠堂」より
（https://www.library.osaka-u.ac.jp/others/tenji/kaitokudo/kaitok10.htm）
（大阪大学適塾記念センター蔵）

# 古典籍を活用した和漢薬に関する総合研究の進捗状況

富山大学和漢医薬学総合研究所
（異分野融合研究　研究代表者）
特命准教授
伏見（ふしみ）　裕利（ひろとし）

富山大学和漢医薬学総合研究所（以後「和漢研」と省略）と国文学研究資料館（以後「国文研」と省略）の間では、「古典籍を活用した和漢薬に関する総合研究」と題した異分野間の共同研究が始まって二年が経過しようとしている。共同研究のテーマの一つとして、江戸時代の医学書である『広恵済急方（こうけいさいきゅうほう）』の記載内容について、和漢研の民族薬物資料館で作成している民族薬物データベース（ETHMED）[1]を通じて公表する作業を共同で行っている。

和漢研の民族薬物資料館では、故難波恒雄先生が約五十年前から、日本・中国・韓国・台湾・インドなどアジアを中心とした伝統医学で使用される生薬を蒐集、保存、展示しており、生薬数は二八、〇〇〇点以上にのぼる（下図）。生薬の蒐集は共同研究者の一人でもある小松かつ子先生に引き継がれている。

今回、共同研究のきっかけとなったのは、和漢薬の世界で一般的な生薬「陳皮」である。基源はミカン科植物の成熟果皮を乾燥したもので、芳香性健胃整腸薬として、消化不良に応用される。『紀伊国物語』の中で、「豊臣秀吉が陳皮を集めて陣羽織を入手した」との記載があり、国文研の先生方は周知の事実であったが、私には初耳であった。

すでに「陳皮」の成分研究は、和漢研で小松先生らにより行われていたことから、専門家の土田貴志氏（現クラシエ製薬所属）に尋ねたところ、現在日本市場に流通している陳皮は主にウンシュウミカン（*Citrus unshiu*）の果皮であるが、豊臣秀吉の頃には、キシュウミカン（*Citrus kinokuni*）という小ミカンが一般的であったこと、またキシュウミカンの果皮は成分的にウンシュウミカンよりもポンカンに近いとのことであった。次に静岡市の国立研究開発法人の果樹研究所カンキツ研究興津拠点からキシュウミカンの提供を受けたところ、キシュウミカンは、ウンシュウミカンに比べ小さ

民族薬物資料館の内部

く、種子が多いので食べることのできる部分は少ないが味は甘いのが特徴であった。なお現在、静岡市の駿府城公園には徳川家康お手植えのミカンとして、キシュウミカンに近い系統が植えられている。「陳皮」は七味唐辛子にも配合されており、秀吉の時代に唐辛子が日本にもたらされたことから、両者の関連性についても興味深く、現在検討中である。

一方、共同研究の成果の一部は、今年の九月に富山で開催された日本生薬学会第六十三回年会の中で「江戸時代の和漢薬と人々の暮らし」と題して、市民公開講座を行った(左図)。和漢研の門脇真所長が座長を務め、はじめに今回の和漢研と国文研との共同研究の紹介をした。当日は百名余りが入る会場が満席となり、立ち見が出るほど盛況であった。聴講者の中には一般の方々以外に学会関係者も含まれており、今回の和漢研と国文研との共同研究に対する関心の高さが伺えた。

日本生薬学会市民公開講座

公開講座では先ず国文研側から岩橋清美先生により、国文研の紹介、『普救類方(ふきゅうるいほう)』と『広恵済急方』[2]の関連性、各地の古文書の調査結果について、また入口敦志先生からは、漢字、カタカナ、ひらがな交じりの医学書の表記に関するお話しがあった。和漢研側から服部征雄名誉教授により、小田原の外郎、富山の反魂丹など日本の売薬に関して、今後はこれらの霊薬の現代医薬的見地からの研究が必要であるとのお話しがあった。また伏見は、富山藩十代藩主前田利保公の編纂した『本草通串(ほんぞうつうかん)』に関する紹介を行い、富山県薬用植物指導センターの田村氏の協力の下、絶滅が危惧されているムラサキについて『本草通串』の記載をヒントに、アルカリ土壌で栽培試験を行った結果、貝化石を二〇〇g／㎡の割合で添加したときに比較的良好な成長が認められたとの報告を行った。

両機関は、元来、古典籍を使用する点で共通している。『本草通串』の研究を通じて、品質の良い材質の紙を使用していること、漢字やカタカナの使用方法、表裏表紙の木目出しの手法など、和漢研だけでは知ることのできない様々な知識を国文研の先生方から教えていただいた。改めて共同研究の大切さを痛感するとともに、得られた知識は講演会などを通じて一般の方々に還元している。

今後も共同研究を継続していくことにより、お互いの長所を生かした様々なテーマによる共同研究が始まることが予想される。和漢研は実際の薬用植物や生薬について栽培や成分研究、薬理学的研究などの科学的研究が得意分野であり、国文研は文献を利用した研究に秀でている。新たに広がる共同研究から得られる研究成果は、様々な方法を通じて広く国民に還元していくことが望ましい。

(1) ETHMED: http://ethmed.u-toyama.ac.jp/Search_jp/

(2) 普救類方(一七二九年刊)、広恵済急方(一七九〇年刊)共に江戸時代の「家庭の医学」

# 作業部会における進捗評価を受けて

国文学研究資料館　館長
古典籍共同研究事業センター長　今西（いまにし）　祐一郎（ゆういちろう）

当館が実施主体となって行っている、学術の大型フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」は、準備期間の一年をあわせ、本年で四年目を迎えている。本事業は、毎年度、文部科学省所轄の「科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会に設置された「学術研究の大型プロジェクトに関する作業部会」（「大型プロジェクト作業部会」）および「運営費交付金作業部会」での進捗管理が行われることになっており、本年は、去る六月二十八日に、当館において現地調査を含む詳細なヒアリングが開催された。

事業の進捗に関するヒアリングでは、昨年度のヒアリングにおいて指摘された、データベース作成を中心とする六点の留意点に対する対応状況が質された。その六点とは、

① 国文学研究者以外の異分野研究者等の利用促進と検索機能の充実。
② タグ付けによらない検索機能の高度化、画像検索機能の導入。
③ 先進性の高いデータベース構築のための人材確保と国立情報学研究所との協働。
④ 長期的な展開を視野に置いた計画実施体制の構築を期待するとともに、歴史的典籍の画像化技術などデータベース作成のノウハウを蓄積し、ソフトウエアの内製化をはかる。
⑤ 事業の推進により見込まれる（異分野も含む）具体的な成果への展望を明確にするため、関連コミュニティとの積極的研究・検討を行う。
⑥ 他分野・他機関から優れた研究者の計画推進へのさらなる参画を求める。

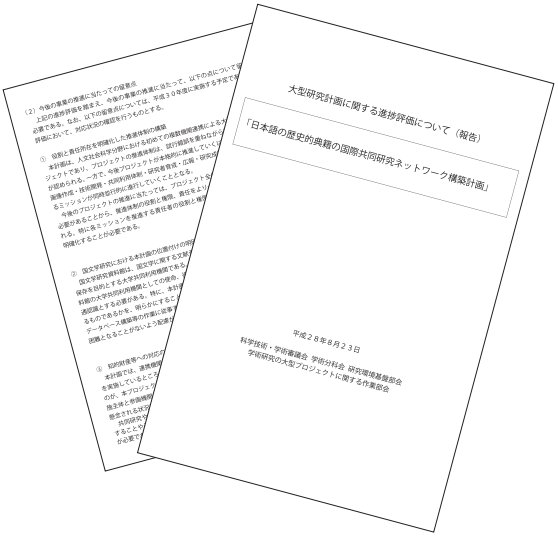
というものであった。

古典籍共同研究事業センターにおいては、上記の留意点に的確に対応すべく、山本副センター長、井深事務室長以下、関係者の努力により成果を上げ、本年のヒアリングにおいて、いずれもおおむね適正な対応が為されたとの評価を得ることができた。

なお、今回のヒアリングにおいても、「今後の事業の推進に当たっての留意点」として、

① 役割と責任所在を明確化した推進体制の構築
② 国文学研究における本計画の位置づけの明確化
③ 知的財産等への対応の強化

の三点が示された。その内容は、以下に掲載する八月二十三日付け「大型プロジェクト作業部会」の報告書のとおりである。当館では、これらについても、研究部の改組、従来の事業の見直し等による対応を開始しているところである。今後とも館内外のご支援ご協力をお願い申しあげる。


大型研究計画に関する進捗評価について（報告）

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」

平成２８年８月２３日
科学技術・学術審議会　学術分科会　研究環境基盤部会
学術研究の大型プロジェクトに関する作業部会

# ◆参考資料

## 大型研究計画に関する進捗評価について（報告）
## 「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」〈抜粋〉

〈計画の進捗状況を踏まえた評価〉

本計画では、実施責任機関である大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館において古典籍共同研究事業センターを設置し、事業推進に必要な各種委員会が整備され、実施体制がほぼ整ってきていると評価できる。

日本語の歴史的典籍データベース構築においては、予算措置の状況を考慮し当初計画の見直しを行い、目標点数である三十万点の画像作成は維持しつつも、早急に共同研究等の活用が見込まれる分野を優先して作成する計画に見直すとともに、画像データ作成の作業マニュアルを作成し、国内拠点大学で画像データ作成を実施するなど計画の進捗に大きな遅れを生じないよう、適切な対応が行われていると評価できる。

（中略）

これらを総合的に勘案すると、国文学研究資料館を中心とした国内外の参加機関の連携協力により、概ね計画どおり進められており、順調に進捗していると評価する。

〈今後の事業の推進に当たっての留意点〉

進捗評価を踏まえ、今後の事業の推進に当たって、以下の点について留意が必要である。なお、以下の留意点については、平成三十年度に実施する予定である中間評価において、対応状況の確認を行うものとする。

① 役割と責任所在を明確化した推進体制の構築

本計画は、人文社会科学分野における初めての複数機関連携による大型学術研究プロジェクトであり、プロジェクトの推進体制は、試行錯誤を重ねながら整いつつあることが認められる。一方で、今後プロジェクトが本格的に推進していくにつれて、資料収集、画像作成・技術開発・共同利用体制・研究者育成・広報・研究成果の管理など多岐に渡るミッションが同時並行的に進行していくこととなる。

今後のプロジェクトの推進に当たっては、プロジェクト全体をマネジメントしていく必要があることから、推進体制の役割と権限、責任をより一層明確にすることが求められる。特に各ミッションを推進する責任者の役割と権限、各種委員会の役割と責任を明確化することが必要である。

② 国文学研究における本計画の位置付けの明確化

国文学研究資料館は、国文学に関する文献その他の資料の調査研究、収集、整理及び保存を目的とする大学共同利用機関である。本計画の推進に当たっては、国文学研究資料館の大学共同利用機関としての使命、役割との関係を一層明確にし、関係者の間で共通認識とする必要がある。特に、本計画が、国文学研究の新たな展開にどのように資するものであるかを、明らかにすることが重要である。また、若手を中心とする研究者がデータベース構築等の作業に従事することにより、本来の研究に時間を確保することが困難となることがないよう配慮が望まれる。

③ 知的財産等への対応の強化

本計画では、連携機関や企業とデータベースの構築や様々な技術開発、共同研究などを実施しているところである。しかしながら、本プロジェクトでの成果と考えられるものが、本プロジェクトとの関係が明記されずに発表されている事案が見受けられた。実施主体と参画機関との間で、知的財産などの権利関係の整理が適切に行われているのか、懸念される状況である。

共同研究や技術開発などの研究成果に係る権利関係について適切な管理体制を構築することやデータベースや、画像データの公開に関するポリシーの整備をしておくことが必要である。

平成二十八年八月二十三日
科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会
学術研究の大型プロジェクトに関する作業部会

# 異分野融合の潜在力
## 第二回日本語の歴史的典籍国際研究集会

フィレンツェ大学　教授
（国際共同研究ネットワーク委員会委員）
鷺山（さぎやま）　郁子（いくこ）

二〇一六年の第二回研究集会は、あいにく二日目午前中までしか出席できなかったのだが、それぞれ大変啓発されるところの多い発表を拝聴しながらひときわ印象に残り、また考えさせられたのは、異分野間の連携がもたらす可能性ということであった。寺島恒世副館長のお話がまさにそれを表題とされていたが、国立極地研究所の片岡龍峰氏によるオーロラと古典籍、国立国語研究所の藤本灯、高田智和両氏による人情本コーパスの表記情報アノテーション、北京中医薬大学の梁嶸氏を加えての医書研究など、分野を横断しての取り組みには実に豊かで魅力的なものが感じられる。

これは私一人の感想ではなかったらしく、懇親会で歓談中にも片岡氏のオーロラが話題になったのだが、「まあ、我々文系は理系にコンプレックスがありますからねえ」と自嘲混じりに言った人があって、哄笑（こうしょう）[1]という一幕もあった。とはいえ、昨今、文系に対する風当たりが、強くもうそ寒くも感じられる状況で、これはなかなか笑ってすまされることでもなさそうである。少し前、イタリアのあるラジオ局が人文科学軽視の傾向を話題に取り上げていたが、締めくくりが、目に見える効果や利益に直結しない学問分野に対する圧迫は世界的な趨勢であるという、危機感横溢（おういつ）[2]の結論だった。これではまるで、人文系の研究者はコンプレックスを持つことを強要されているような案配である。

ここには学問、研究の社会還元という、これまた近年とみに叫ばれる問題との関連もある。こういった要請の具体的内容には異論の余地もあろうが、研究の成果を広く一般に公開し、解りやすい形で提供するということは、なされてしかるべきであろう。市民講座や講演、また専門外の人たちが面白く読めて、内容も深い出版物などで、功績を挙げておいでの方達も大勢いるが、私が今回の研究集会を通じて思ったのは、そこにも広い意味の異分野融合が持ち込めないかということである。

理系の研究者の中には、著作の中で文学作品を縦横に引用する方もあれば、詩的な香気さえ感じさせる見事な文章を書く方もおいでだ。翻って、『源氏物語』を解説しながら、位相幾何学や量子力学を引き合いに出すというのはかなりハードルが高い。それは無理でも、一つのテーマを設定して、様々な分野の研究者がそれぞれのアプローチで多角的に貢献することは可能だし、そういった試みは既にあちこちで実践されている。専門外同士が理解し合える対話が必須だから、共同研究の段階から結果を社会に発信する時の形が準備される。もちろん、互いの視野を広げる効果もある。ますます進行するテーマの細分化は、研究深化の指標でもあり、それ自体は決して悪いことではないが、よそ見をすることで自分の立場を相対化、客観視する姿勢も必要であろう。

そこで古典籍である。明確な分野の棲み分けが意識されなかった時代の書物だからこそ、そこには肥沃な土壌がある。おそらくジャンルへの拘りに縛られすぎている現在の我々に、この混沌たる星雲への回帰がもたらしてくれるものは大きいのではないか。今回の研究集会はそれも示唆するものであったと思われる。

（1）哄笑：大声を出して笑うこと
（2）横溢：いっぱいにみなぎること

# タグをたよりに三十万点の画像を探ってみる

国文学研究資料館　副館長　寺島恒世
同館古典籍共同研究事業センター　特任助教　松田訓典

現在公開を目指している日本語の歴史的典籍約三十万点におよぶ画像データベースにおいて、その画像群の中から、一般の利用者の方々、あるいは研究者の方々が自分たちにとって関心のあるものに、いったいどのようにしてたどりつけるようにするのか、というのは大きな課題の一つです。

たとえば、「『源氏物語』を見たい」というように、特定の書名からたどりつくという方法がまず一つ考えられるでしょう。他にもいくつかの方法があるのですが、その中でも現在我々が準備している機能の一つは、近年のウェブサービスでよく使われている「タグ」（＝荷札のようなもの）を利用した検索システムです。

たとえば、ある書物のあるページの中に「筆」「短冊」といったものが文字として記述されていたり、絵の中に描かれていたりするとしましょう。その時「筆」「短冊」というタグがついていれば、それを通して、目的の画像を探し出すことができるようになります（図1）。あるいは「人物」とタグのついた絵を並べてみたりすることで、様々な衣装を目にすることができるでしょう（図2）。

先行実験として、一部の書物に対して、関連の深い研究者たちによるタグ付け作業が現在進められている最中です（図3）。

将来的には「ソーシャルタギング（注）」として、広く一般の方々に対し、タグ付け機能を開放することで、より使いやすくて便利なデータベースへと育っていくに違いありません。

（注）ソーシャルタギング：Web上で公開されているコンテンツに対してユーザーが自由にタグを付与すること

図1　「筆」「短冊」タグ（『絵本磯馴松』より）

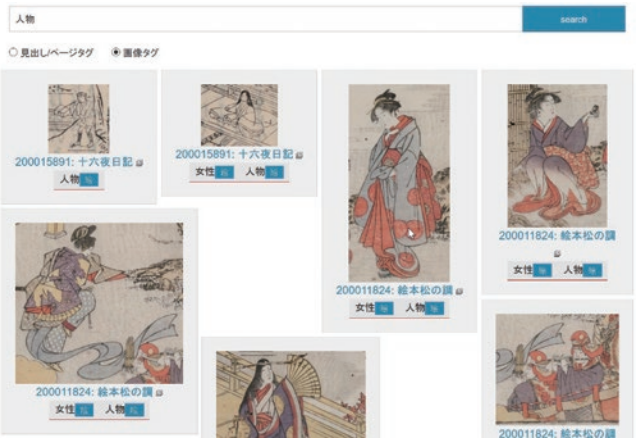



図2　「人物」タグで検索

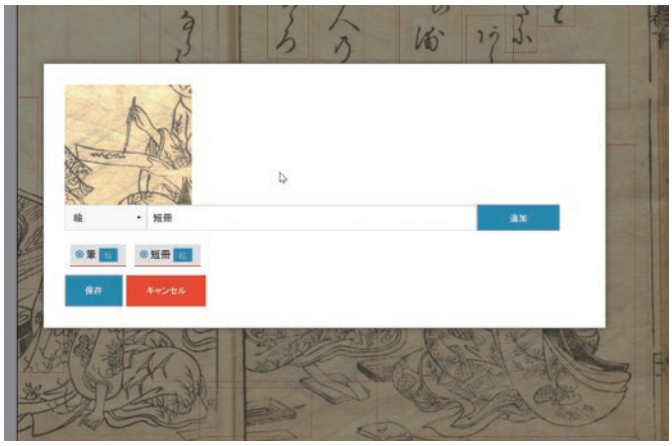



図3　タグ付けしている様子

（図の掲載書籍は国文研蔵）

## 市民参加型ワークショップ開催

■『古典』オーロラハンター2」
［日時］平成二十九（二〇一七）年二月十九日（日）十三時三〇分～十六時三〇分
［会場］国文学研究資料館　大会議室（東京都立川市緑町十―三）
［主催］人間文化研究機構国文学研究資料館ほか

翻刻テキスト、現代語訳、現代レシピをデータセットとした「江戸料理レシピデータセット」を公開しております。

これらのデータセット等を利用して、面白くて役に立つ利活用の道を模索するため、「歴史的典籍オープンデータワークショップ」を十二月九日（金）に国文学研究資料館において「じんもんこん2016」の一環として開催しました。

歴史的典籍NW事業オープンデータセット
http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/data_set_list.html
人文学オープンデータ共同利用センター準備室
http://codh.rois.ac.jp/dataset/

## オープンデータセット

■「日本古典籍データセット」、「日本古典籍字形データセット」、「江戸料理レシピデータセット」の公開

国文学研究資料館は、平成二十八（二〇一六）年十一月十日から、古典籍の画像データ等七百点を「日本古典籍データセット」として、人文学オープンデータ共同利用センター準備室より装いも新たに一般公開しております。

また、十一月十七日から、日本古典籍データセットの一部画像データから文字単位で画像を切り出し、その字形画像と、各文字画像に対する文字コード等の情報をデータセットとした「日本古典籍字形データセット」を、更に十一月二十四日からは日本古典籍データセットの『万宝料理秘密箱』に記載されている卵料理部分の原本画像、

## 協定書・覚書の締結

平成二十八（二〇一六）年度中に締結したもの（十二月末日現在）

国立極地研究所　（協定書　六月　一日）
日本近世文学会　（覚　書　八月　二日）
国立国会図書館　（協定書　九月三十日）
ベルリン国立図書館（協定書　十月十四日）

## プロジェクト名の表記決定

○正式プロジェクト名
（和文）日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画
（英文）Project to Build an International Collaborative Research Network for Pre-modern Japanese Texts
○略称プロジェクト名
（和文）歴史的典籍ＮＷ事業
（英文）NIJL-NW project

## ふみ 第8号は、平成29（2017）年6月発行予定です。

表題の背景色は青です。平安時代の令制では皇室や公卿等が用いる服色が定められており、一般の者が着用することは禁じられていました。また、官位の下の者が上位の服色を着用することは出来ませんでした。青は天皇の色とされていました。

本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の「方丈記」（本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本）を利用しています。

表題「ふみ」の書体は、石川島造船所（現IHI）創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」（活版印刷見本帳）を利用しています。

ふみ
「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター
第7号
〈発行日〉
平成29（2017）年1月13日
〈編集・発行〉
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター
〒190-0014
東京都立川市緑町十一三
TEL 050-5533-2988
FAX 042-526-8883
http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/

当館所蔵の「小児の弄鯨一件の巻」がご覧になれます。
携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。